

SORA

web magazine 2013.jul. vol.19

水俣

Minamata

MAP
CLICK!

一度は死の海と化した水俣の海はいま、
小魚たちが寄り集まるおだやかな優しい海の姿を見せている。
その水俣を見つめ続けた尾崎カメラマンのフォトレポート

Photo & Text : Tamaki Ozaki

見つめ続けてきた水俣の海

tsumi-shima tsumishima.com
ダイバーの夢をつみあげていく島



(株)ワールドツアープランナーズ
www.wtp.co.jp

© 2012
World Tour Planners Co., Ltd.
All Rights Reserved.





水 Minamata 俣

S驚き Surprise

朝、いつものように水俣の漁港に顔を出す。漁師さんたちが水揚げする様子を写真に収めながら、船に乗せて欲しいと、突然の無茶なお願いを繰り返していた。案の定、断られ続けていたところ…「明日ならよかばい」という、ありがたい返事を一人の刺し網漁師さんにもらった。

翌朝、船に乗ったものの、おじさんがあまりにふらりと気構えなく出港したので、実はちょっと不安だった。本当に刺し網を仕掛けているのかな、と。そう思ったのも束の間、すぐさま漁場に到着すると、一人で手際よく網を上げ、網にかかった魚を手際よく外し…さっきまで疑ってごめんなさい!と思わせるほど、高級魚を次から次へと揚げていくおじさん。船はすべて一人で効率よく作業できるように改良してあった。

そんなおじさんは命あるものを大事にし、魚を愛していることが伝わる魚の扱いだった。最後は、カメラを前にヒラメにキスまでしてくれるお茶目なおじさん。おまけにニット帽にはご飯粒までつけて…漁もさることながら、どこまでも愛嬌のあるおじさんは、実に魅力的な人だった。

そのおじさん、なんと私が親しくしている漁師さんが「漁師の先生」と尊敬している人だったのだ。しかも、刺し網漁師のなかで一番の水揚げ量を誇るというのでこれまたびっくり。海に行くといつも新たな出会いが待っている。海の中の生きものたち、そしてその海で働く人たち。

一期一会の生きものたちを大切に写真に収めつつ、人と人が繋がっていく驚きの出会いもまた大事にしようと思った瞬間だった。

一度は死の海と化した水俣の海はいま、小魚たちが寄り集まるおだやかな優しい海の姿を見せている。海藻が繁茂するその陰には、生きものたちがかくれんぼでもしているかのように行ったり来たりと見え隠れする。この姿はどここの海でも見られるごく普通の光景だ。その普通のことの当たり前にあることが、何より幸せなことなのだと、水俣の海に潜り改めて感じている。

海藻のトンネルは、生きものたちを優しく包み、そこにいる私さえも守られているような気がする。だから私は、この季節の海が一番好きだ。小魚たちと一緒に、探検しているようにぐる

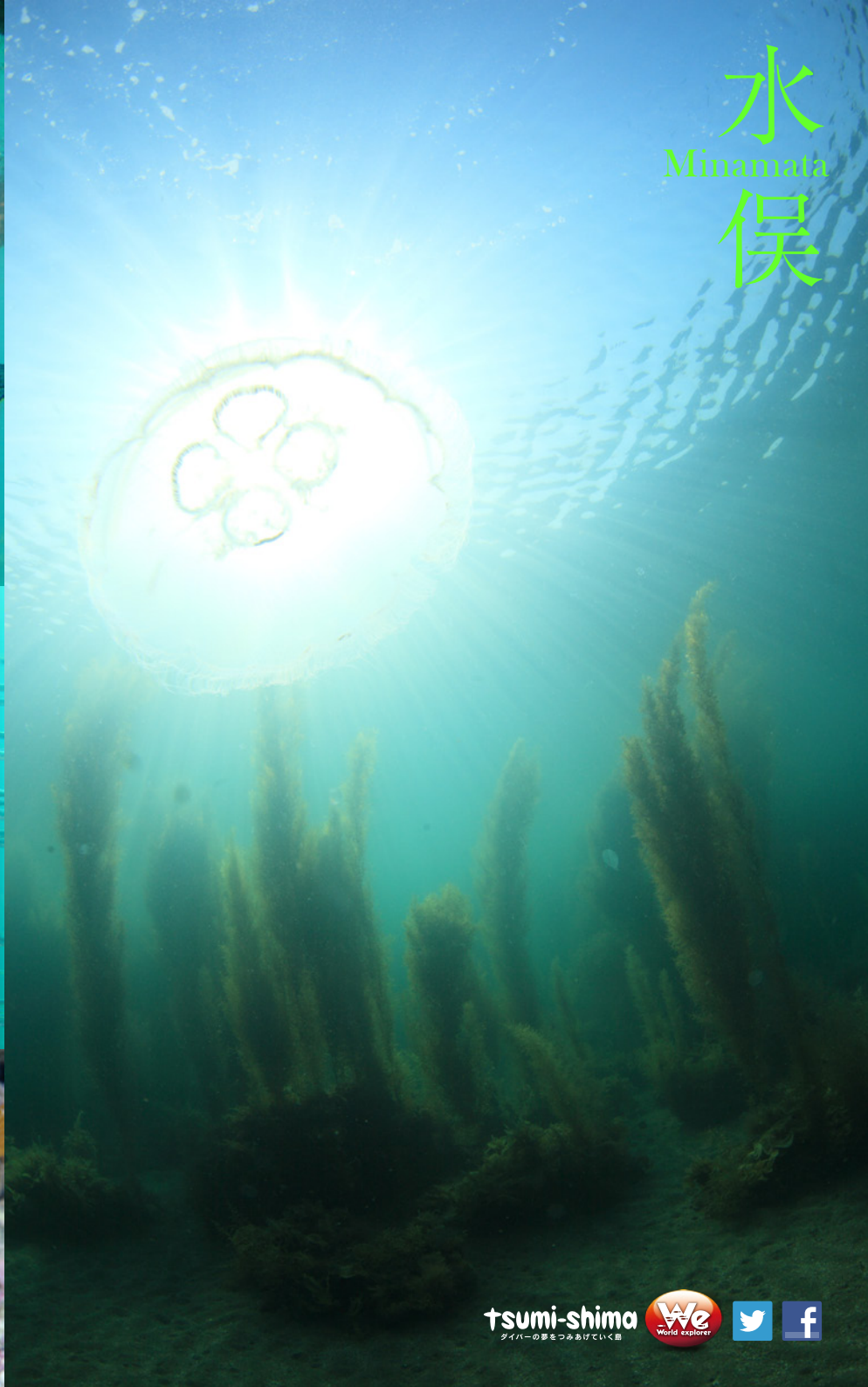
ぐると泳ぎ回ると、まるで自分も海の生きものになったような気分だ。

海とはとてつもなく大きな力を持っている。人間の犯した愚かな失敗も許し、自然治癒の力を思う存分発揮している。包み込むような優しさに魅せられ、一度は海から離れた人びとも、この水俣の海に帰ってきた。魚たちも人びとも、みんなが海に集い、そして海が「おかえり」と言っているかのように、長く伸びた海藻が穏やかな波に揺らめいている。

O 海
cean



水
Minamata
俣



tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく



R^{ロマン}omance

水
Minamata
俣

海に潜るとき、晴れわたった空があると気持ちがいい。海の中も明るくなるので、できることなら晴れていてほしいと思うのが常だ。しかし雨は、大地にとっても海にとっても大切なもの。だから、海に降り注ぐ雨の写真を撮りたい、と思っていた。晴れ女？ ゆえになかなか機会に恵まれなかったある日、急に真っ黒な雲が現れ、激しく雨が降り出した。

山々、大地、そして広大な海も受け皿となり、大量の水を恵みとして吸収していく。海に雨が多く降り続けると、水面近くは塩分濃度の差から、もやもやとしたケモクラインができてくる。「ちょっと見通しが悪いな。」と思うこともしばしば。

しかし…水が跳ねる水面に目の高さを合わせてみると、そこは別世界が広がっていた。雨粒ひとつぶひとつぶが、自分の意思で跳ね踊っているような不思議の国の世界。同じ目の高さで見ることの素敵さを改めて実感した。そういえば、初めて空気ボンベを背負って海に潜ったとき、魚と同じ目線で泳いでいることにこのうえなく感動し、小躍りしたくなるような気持ちになったことを今でも忘れることができない。雨が跳ね上がる一粒の奥に、宇宙を見た気がした。



川と海が近くて川の恵みが累々と注がれている。
水俣の水の豊かさを感じる瞬間。



水 Minamata 俣



R ロマン
Romance



tsumi-shima
ダイバーの夢をつみあげていく島



行動 Action



水俣に「あばあこんね」(意味:じゃあおいでよ)という異業種で集まった若手グループがいる。保育園勤務の男性や、みかん作りをする人、お茶を作っている人、市役所に勤務する人、鷹匠…実にさまざまな職に就いていてなかなか面白い。みんなの想いはただひとつ、水俣を楽しみましょう! このことに尽きる。アプローチはさまざまだが、負のイメージが大きい水俣でプラスに転じる考え方を持って何事にも取り組んでいる。

水俣にはこんなにも素晴らしい自然があることを、こんなにも海と山が近い恵まれた環境があることを、水俣を離れた時間があつたから気付くことができたという。

メンバーの親の世代には、水俣病という大きな問題を抱え過酷な時代を生きてきた人たちが。闘って生きている親の姿を見て育ち、人と人とが憎しみ合う姿もまた見てきたのだろう。だから自分たちの世代は、今までと違う角度から水俣を表現したかったのだろう。共に酒を呑み語らい、みんなの意見を尊重し合う。それは、メンバー一人一人にとってとても刺激的な時間なのだと感じる。

水俣はその昔、広大な塩田があり塩作りが盛んだった。しかしチソが水俣の城下町になると時を同じくして、塩田もすべて消えてしまった。そのときの塩はとても美味しく評判だったという。

「あばあこんね」のメンバーは、自分たちの故郷で水俣の海水で、塩を作りたいと強く思った。美味しい塩ができた暁には、手作り塩としてブランド化し、販売へと繋げるつもりだ。

第一回目の塩作りが、今年(2012年)7月に水俣にある塩竈神社でおこなわれた。朝七時、海底から清水が湧き出ている、“海と山が繋がる場所”で、腰までつかりながら海水を汲み上げた。塩分濃度は低くなるけれど、ミネラルが多く含まれるので、きっと美味しい塩ができるに違いない、そういう思いから選んだ場所だった。メンバーそれぞれが交代しながら1日かけて作った塩。経験者は一人もおらず、年配の経験者から聞いてきたことを実践するのみ。まだまだ荒削りな塩だけれど、どれだけでも舐めてもらえるような、やさしいからさのまろやかな味わいの塩だった。みんなの水俣への想いがぎゅっと詰まった、優しい味がした。

「あばあこんね」のみんなと初めて会ったとき、これから水俣は大きく変わるかもしれないと感じた。それは、とても清らかで新鮮な風を、水俣に吹き込んでくれているから。すてきな若者たちが水俣に暮らしていることは、水俣の財産になるだろう。